

一心寺かわら版

第六号 平成十八年一月発行

謹んで新年のご挨拶を申し上げますとともに皆様のご健勝とご多幸を念じ上げます。本年も念仏相続し、ともに浄土への道が歩めますことを願い上げます。

昨年・今年と三豊・観音寺では市町村合併があり、大きな変化の一年となります。合併によって人件費を削減することができ、良い面があるといえます。しかし役所が遠くなり、地域密着のきめ細かなサービスができなくなることで、またその地方の特色が保てなくなるなど多くの悪い面が聞こえてきます。

親鸞聖人は「親鸞は父母の孝養ためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。そのゆえは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。」とおっしゃいます。生きとし生けるものすべてが私のいのちにつながっているのですから、父母のためだけに念仏するのではなく、すべてのいのちを助けるために仏となる道を歩むべきであると説かれています。

何年前になるでしょうか、「宇宙船地球号」という言葉が使われていたことが思い起こされます。合併によって同じ市民となり、私どもはみな繋がったいのちの共同体であることに気づく縁とな

れば、すばらしいこととなるのではないのでしょうか。



「一人の淋しき」「一人にしない」と

如来の声 にもあみだぶつ」(小滝信生師)

本年の青年会柱掛け法語、真宗僧侶小滝信生師のことばです。この法語にある「一人」、これが現代社会をあらわす一つのキーワードであるような気がします。

時々「一人のほうが気楽でええわ」という言葉を耳にすることがあります。「二人」であれば誰にも邪魔をされず、好きなようにできる。他人に自分の思いをぶつけてみたところで受け入れてはくれない、だったら誰にも関わらず生きていった方が楽だという考えでしょうか。

また「人間は結局一人やから」という言葉も耳にします。昨今、凄惨な事件が多発していますが、これは「一人」であることの結果ではないかと思えます。気楽なはずの一人でいることが実は、

私は一人ぼっちであるという不安、淋しさにつながり、そこから事件が起っているように思います。

『無量寿経』には「人、世間愛欲のなかにおいて、独り生れ独り死し、独り去り独り来る。行に当りて苦楽の地に至り趣く。身みづからこれを当くるに、代るものあることなし。」（人は



世間の情にとらわれて生活しているが、結局独りで生れて独りで死に、独りで来て独りで去るのである。すなわち、それぞれの行いによって苦しい世界や楽しい世界に生れていく。すべては自分自身がそれにあたるのであって、だれも代わってくれるものはない。)

とあります。確かにこれは人間の真実です。一人で生れ来て一人で死に去って行く、誰も代わってくれない。しかし、これだけでは淋しいに違いありません。

それは真実ですが、その私が『無量寿経』に「われなんぢら諸天・人民を哀愍すること、父母の子を念ふよりもはなはだし。」（私があなたたち天人や人々を哀れむのは、親が子を思うよりもなお一層深い）とあるように仏さまに思われ、親鸞聖人には「一人居てよろこびなば二人と思ふべし。二人居てよろこびなば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。」（一人で喜んでいても二人で喜んでいると思いなさい、そのもう一人は親鸞である）と思われています。仏さまはこの私を離れてはいないので、阿弥陀仏とは、

はかりしれないのちの願いであり、『阿弥陀経』に「俱会一处」とあるように同じ浄土に生まれよと願われているのです。

あるコマーションで「いのちを大切に何百回言われるよりも、一言あなたのいのちが大切だと言われるだけで生きていける」という言葉が流れていました。

私は親から生まれましたが、親だけではなく外からさまざまに温もりを受けて育てられました。また自分の内にある力も、はかりしれないのちからの賜りものです。私が知らない、覚えていないからといって私のいのちが願われていない、育まれていないわけではありません。はかりしれないのちから願われ育まれているのが私なのです。

現代は一人の方が気楽でいいという考えが広まっています。私も一人でいる気儘さが好きです。中学校に入って自分の部屋が与えられた時、大学に入り一人暮らしを始めテレビが自由に見られるようになった時はうれしかったものです。しかし、その「一人」とはあくまでも仏さまや家族などのいのちに見守られた「一人」であったのであり、「独り」ではなかったのです。そこには淋しさではなく、温もりがあったのでしよう。

私は「一人」だと思ふことがあったとしても、私を育むいのちの存在に気付いたならば「独り」という淋しさから抜け出して、温もりのある人生を歩むことができるでしょう。

このような現代にこそ、あなたを一人にはしないと呼び掛けて

下さる阿弥陀仏（はかりしれないのちの願い）の声に耳を傾けたいものです。

お経ってなあに？③ 伽陀

真宗の法事では勤行をするわけですが、その始めにはほぼ必ず「伽陀」（かだ）が唱えられます。「伽陀」とは「うたう」ことを意味するサンスクリット語の発音を漢字で表記したものです。

最も有名なものが「先請弥陀入道場 不違弘願応時迎 観音勢至塵沙衆 従仏乗華来入会」です。先請伽陀と呼ばれますが、「ぜんしようみだにゆうどうじょうく」と始まるこの一節に聞き覚えのある方もいらっしゃるでしょう。これは「先ず弥陀を請じたてまつりて道場に入りたまえ、弘願に違せずして時に応じて迎えたまへ、観音勢至塵沙の衆、仏に従い華に乗じて来りて会に入りたまへ」ということです。

法事を始めるに当たってまず、その場に阿弥陀仏を迎えて、その本願力によって浄土往生を願うことから始めるのです。もちろん私どもがこのように「伽陀」を唱えるまでもなく、阿弥陀仏はじめ諸仏・諸菩薩は私どものことを念じておられます。しかし、それを忘れがちな私ですので、まず「伽陀」を唱えることによつて阿弥陀仏が今私を救わんとここにましますということをわが身に受け、その本願のお導きを聞かせていただくべく勤めさせていただきます。